

# 非行経験者が援助要請を行うまでの 他者との体験過程について

—非行経験者の手記の分析から—

廣 井 いずみ\*

Young Ex-Offenders' Development of the Human Relationships  
Needed for Help-Seeking Behavior

Izumi HIROI

## 要 旨

非行経験者が非行から離脱するときに、他者とのように関係性を発展させ、どのような体験を積むのか、援助要請行動が見られるのはどの段階か、非行経験者の手記を分析することで検討した。非行経験者は、大人に対する不信任感、周囲との機能不全のコミュニケーションの課題を抱え、それぞれの課題に対して、①支え、ガイドしてくれる大人との出会い、②周囲との関係性の構築を体験することが、課題解決のプロセスになる。援助要請には、非行や非行集団からの離脱のための援助要請、今後の進路の実現のための援助要請の2種類が見られ、前者については、①支え、ガイドしてくれる大人との出会いを経験していることで、主としてフォーマルな援助要請が為され、一方後者については、①支え、ガイドしてくれる大人との出会い、②周囲との関係性の構築を体験した後、構築された関係性を基盤に、インフォーマルな援助を求めるのではないかと論じた。

キーワード： 非行からの離脱 援助要請 機能不全のコミュニケーション  
コミュニティー感覚 M-GTA

## I 問題と目的

「助けて」と言えないことは、現代社会の問題として語られるようになった（NHK クローズアップ現代取材班、2013）。非行からの離脱のプロセスにおいても、必要に応じて援助を求めることができることは、非行からの離脱の成否に関わる重要な対処行動である。

少年院、保護観察などの処遇を受けている場合や、更生保護施設<sup>1)</sup>や自立準備ホーム<sup>2)</sup>などに入所している場合には、指導を受けるとともに、支援も受けることができる。しかしいずれの場合においても、処分が終わり、あるいは矯正施設出所後一定期間が過ぎれば、支援は終了する。

2018年9月12日受理 \*社会学部心理学科教授

支援終了後は、自らの力で生活を構築する必要がある。職を得る、住まいを確保することから始まり、日常生活をこなすには、援助を必要とする場面に遭遇することであろう。その場合に、適切に援助を求めることができなければ、たちまち生活は立ちゆかなくなり、その結果再犯に至るリスクが高まることにもなりかねない。

助けを求めること、すなわち援助要請とは、個人が問題の解決の必要性があり、もし他者が時間、労力、ある種の資源を費やしてくれるのなら問題が解決、軽減するようなもので、その必要のある個人がその他者に対して直接的に援助を要請する行動 (DePaulo, 1983) を言う。

また援助要請とは、他者を頼みとする対処行動であり、したがって多くの場合、社会的関係や対人スキルが基盤となる (Rickwood et al., 2005)。しかしながら、非行を経験した者の中には、大人との関係性を拒否、あるいは他者から受け入れられていないと感じるなど、他者との関係性構築において課題を持っている者が多い。例えば、天貝 (1999) は、非行群が一般群に比べ人一般に対する信頼感が乏しい傾向を示したと述べる。また、非行少年達の社会復帰を支援している渋谷によると、少年達は、今までいろいろな形で否定ばかりされてきたので、大人と壁を作ると述べる (廣井ほか, 2018)。また非行化が進むにつれ、非行集団とのつながりが強くなる一方、学校集団や非行傾向を示さない他の仲間集団とは疎遠になる傾向があり、交際範囲が限られる現象も生じる。

対人関係での課題を持っていると思われる非行経験者が、援助要請行動ができるようになるには、他者との関係性が深まる体験を持ち、援助要請行動の基盤が強化される必要があるのではないかと考えた。そこで本研究では、非行経験者が非行から離脱するときに、他者とのどのような関係性を持ち、どのような体験を積むのか、援助要請行動が見られるのはどの段階か、検討することにした。上記の天貝、渋谷の指摘から、非行経験者本人が他者との関係性をどのように捉えているのかが重要になると考え、当事者の視点から捉えることとした。

## II 方法

### 1. データ

『涙 それぞれの軌跡 私たちの「非行」体験 第3集』(「非行」と向き合う親たちの会、2004) 及び『セカンドチャンス<sup>3)</sup> 人生が変わった少年院出院者たち』(セカンドチャンス!、2011) に収録されている手記のうち、次項に記載する分析テーマを含んだ語りとなっている手記を選択した。

### 2. 分析方法

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下、「M-GTA」と記す。) を用いた。M-GTA は、「人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究であること」、「ヒューマンサービス領域が適している」こと、「研究対象とする現象がプロセス的性格を持っていること」に適している (木下、2003) ことから、他者との関係性構築の変遷が、援助要請の発現とどのように関係しているのかを、プロセスを追って検討しようとする本研究に適合すると考え、

用いた。

本研究において、分析テーマは、「分析焦点者が体験する、他者との関係性の変遷のプロセスは、援助要請の発現に関連性があるのか」とし、分析焦点者を「非行を経験し、他者との関係性に課題を感じている者」とした。分析テーマに照らして、データの関連する箇所に着目し、解釈した内容を定義づけした後、概念を生成した。類似の概念や定義のある場合には、定義に照らして検討し、統合が可能と判断した場合には、概念、定義を見直し、一つにまとめた。複数の概念からなるカテゴリーを作成し、表1にまとめた。

### Ⅲ 結果

#### 1. 対象者の属性

データからは以下の属性が読み取れた。男子7名、女子3名。関わった非行種別は、窃盗、傷害、暴走、薬物使用と多様である。複数種の事件を起こしている者もいれば、薬物使用のみ、万引きのみの者もいる。現在の生活は、働いている者が、10人中8人であり、残る1人は大学生、1人はアルバイトをしながら教員採用試験を目指している。

#### 2. カテゴリー名、概念名、定義一覧について

カテゴリー名、概念名、定義一覧について、表1に記載した。カテゴリーの内容が多領域にわたっていたため、次のカテゴリー群に分類した。A「非行を起こすまでの周囲とうまくいかない時期」に関するカテゴリー群、B「関係性の修復」に関するカテゴリー群、C「自分を受け入れる」ことに関するカテゴリー群、D「他者との関係性を含んだ将来への展望」に関するカテゴリー群、E「援助を求める」ことに関するカテゴリー群である。

なおB「関係性の修復」に関するカテゴリー群について、本人の体験として2群に分けることにより分析が精緻になると考え、次の2群に分けることにした。①支えガイドしてくれる大人との出会い（1対1の関係性）、②周囲との関係性の構築の2群とし、それぞれに合致するカテゴリーを振り分けた。①の支えガイドしてくれる大人との出会いでは、自分より経験のある大人に支えてもらい、進むべき方向性をガイドしてくれる段階とし、②の周囲との関係性の構築では、集団に支えられる、受け入れられる、集団に関わるとするカテゴリーを分類した。この2群に分類した理由は、1対1で支えてもらう受け手としての体験と、集団との関わりで得られ、双方向性の関わりに発展する体験とは質が異なると考えたからである。

次に、Bの①支えガイドしてくれる大人との出会いの段階、②周囲との関係性の構築の2群のいずれが先行するのか、事例ごとに検討した結果、①、②の順に生起すると考えた。生起の順についての検討内容は後に述べる。

#### 3. 「関係性の修復」及び「援助を求める」について

本研究の分析テーマは、「分析焦点者が体験する、他者との関係性の変遷のプロセスは、援助要請の発現に関連性があるのか」であるので、「関係性の修復」及び「援助を求める」について

焦点をあてて検討する。

10事例のうち1事例は、両親からのサポートのみについて言及し、①の支え、ガイドしてくれる大人との出会い、②の周囲との関係性の構築についても、援助要請についても記載がなかったので、残り9事例について検討した。

#### (1) 家族の支えの時期について

家族の支えについて触れられていないのが1事例であり、残り8事例は触れられていた。家族の支えは早期から見られ、中盤以降他の援助者に、記載が取って代わられる。

#### (2) 関係性の修復の対象

①の支えガイドしてくれる大人との出会いで対象となるのは、学校、保育園の先生、職場の上司、少年院の先生、薬物の自助グループのメンバー（指導的立場にある）、年長の同級生、年長の知り合い、実習先の指導者であった。②の周囲との関係性の構築の対象は、高校のみんな、後輩、近隣者、クラスの仲間、職場、ダンスチーム、セカンドチャンスのメンバー、薬物の自助グループ、教育実習での生徒達であった。

#### (3) 援助を求める行動について

援助を求める行動について記述がなかった事例が1つあったので、8事例について検討した。8事例のうち、援助を求める対象が親のみであった事例が1つあった。親以外の対象は、先生、近隣者、実習先の指導者、自助組織であり、先生とした事例が4事例、実習先の指導者（教師）を含めると5事例となり、先生の占める割合が高い。

本研究で見られた援助要請行動には、2種類ある。一つは、犯罪や逸脱行動から離脱のための切迫した援助要請である。もう一つは、進路が定まってから、目標実現のために求める援助である。

#### (4) 家族の支え、①の支えガイドしてくれる大人との出会い、②の周囲との関係性の構築の生起順序、及び援助を求める行動の時期

生起の順序を検討するための資料の一例として、『涙 それぞれの軌跡』のF・Kを例として示す（表2）。F・Kについて示すように、9事例すべてにおいて、家族の支え、①、②、援助を求める行動について整理し、検討した。

その結果、①の支えガイドしてくれる大人との出会いが、②の周囲との関係性の構築より先に生起している事例が7、同時に生起している事例が1、②の周囲との関係性の構築の生起順序が先に生起している事例が1であった。そこで生起する流れは、①、②の順と暫定的に考えた。またカテゴリーが示す内容から、①の支え、ガイドしてくれる大人との出会いは、大人不信からの回復のプロセスと考えられた。②の周囲との関係性の構築は、機能不全のコミュニケーションの回復のプロセスと考えられた。①、②の順序性も加味して考えると、まず大人不信からの回復を果たすことにより、②周囲との関係性の構築が容易になり、周囲との機能不全のコミュニケーシ

ョンから回復するのではないかと考えた。

次に援助を求める行動が、家族の支え、①の支えガイドしてくれる大人との出会い、②の周囲の人との関係性の構築との関係で、どの段階で生じたのか検討する。親を対象とする援助要請は、初期に見られる。親以外に援助を求めた事例では、自助組織に援助を求めた事例が、②の周囲との関係性の構築以前であり、援助の内容は薬物からの離脱のために自助組織に入るという内容であった。他は②の周囲との関係性の構築の後か同時に生起していた。1例、他の援助の求め方と異なる時系列にある事例があった。それは小学校時代に担任のおかげで、クラスでの仲間とのつながりもあり、②の周囲との関係性の構築もあったが、その後担任と離れることで孤立し、自らかつての担任であった支援者を求める援助要請行動に出た事例である。②の周囲との関係性の構築を先に経験しているが、いったん途切れ、再度周囲との関係性の構築を果たしている点が他と異なる。この場合の援助要請の対象者は「支援者」とし、2度目の周囲との関係性の構築を念頭に記載した。周囲との関係性の構築以後における〈援助を求める〉は、進路に向けた指導を請う内容であった。この時期では、自分の進むべき方向性が見え、将来に希望を見いだす時期である。この時期では、進路の実現のために援助要請行動がとられている。

#### 4. 結果図について

表1の結果及び前項の検討結果から、結果図を作成した。

A、B、C、D、およびEの順に、カテゴリー名及び概念名を用いて、ストーリーラインについて述べる。なお概念名は【 】、カテゴリー名は〈 〉を用いて表す。

##### A 非行を起こすまでの周囲とうまくいかない時期

対象者のうち何人かには、〈暴力の被害体験〉があった。【防御しきれない攻撃に、傷つき、怯える体験】をし、【暴力への適応】をはかることで生き延びてきた。大人との関係がうまくいかない別の理由として、〈大人との葛藤、内面の葛藤に悩む〉ケースがあった。【大人に対する安心感と反発心】を同時に感じるアンビパレンツ、【自分自身の中の葛藤】にも悩んでいた。中には葛藤への対処として【親との関係をあえて切る】ケースもあった。葛藤に悩むケースも暴力の被害体験のケースでも、〈大人に対する不信感〉は強い。【尊厳を持って扱われてこなかったことによる大人不信】から、【納得できない大人社会との孤立無援の戦い】を挑んでいる。これらにより、〈周囲との機能不全のコミュニケーション〉が生じている。【周囲の無理解】に悩み、【頼る、頼られる関係性を渴望】するが、【うまくいかない意思疎通】となる。

##### B① 支え、ガイドしてくれる大人との出会い

支えの基礎になっているのが、〈家族の支え〉である。【いつでも受け入れてくれるやさしさ】、【苦しい時を支えてくれた家族の愛】に守られ、家族は【変化を生み出す安心の土壌】となっている。それはまた、【家族の支えによる葛藤】を生み出した。

家族以外の者との間で、〈大人への信頼感〉の構築を行う。【厳しい指導者への納得できない気持ち】を抱くこともあるが、【耳を傾け本気で考えてくれる大人への信頼】、【優しさを感じるふ

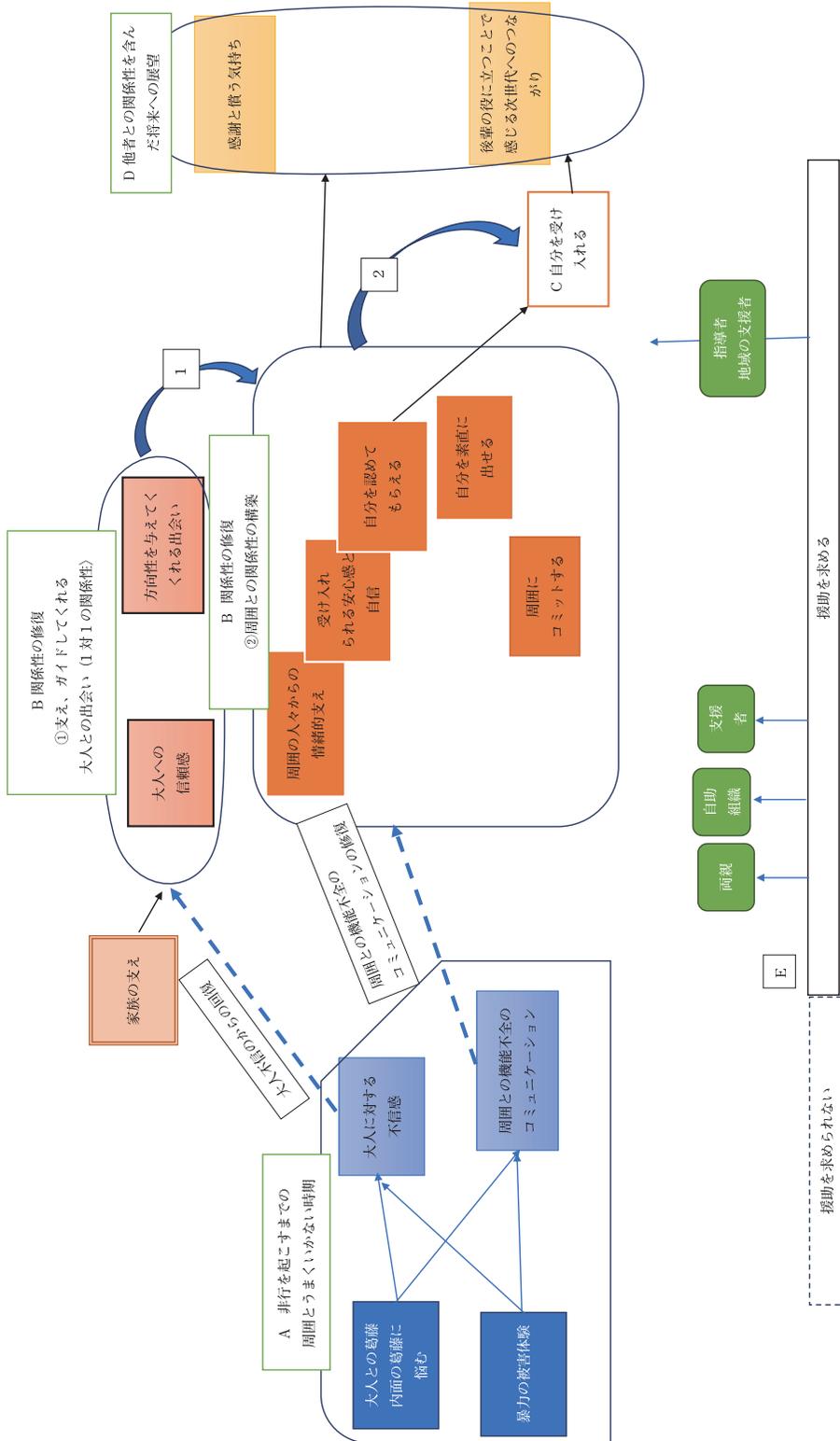


図1 非行経験者が援助要請を行うまでの他者との体験過程 (結果図)

れあい】も体験する。信頼関係構築の後、〈方向性を与えてくれる出会い〉がある。【自助組織との出会い】、【励ましによる人生の転機】、迷ったときに【肯定的な意味づけで支えられる体験】である。そのような出会いを得るには、【マイ師匠との出会いのためのレディネス】が必要と述べた者がいた。

#### B② 周囲との関係性の構築

周囲との関係性の構築の段階では、〈周囲の人々からの情緒的支え〉を受け、〈受入れられる安心感と自信〉を得、〈自分を認めてもらえる〉と感じる。このようなやりとりから、〈自分を素直に出せる〉ようになり、〈周囲にコミットする〉ようになる。〈周囲にコミットする〉とは、【みんなで体験した達成感と一体感】を感じることができ、【コミュニケーションの広がりによる疎外感の解消】が感じられることを指す。

#### C、D 自分を受け入れ、将来への展望が語られる時期

〈自分を受け入れる〉段階では、【受け入れられることによる自己受容】で、【新たな自分】との出会いが生まれる。

この段階に至り、〈感謝と償う気持ち〉が語られるようになる。【親への感謝と申し訳なさ】から、【もう迷惑は掛けまい】と心に決める。【被害者、その家族に対する悔いと回復の願い】を思う。

また【後輩や仲間の役に立つことが自分の責務】と感じ、〈後輩の役に立つことで感じる次世代へのつながり〉を意識するようになる。

#### E 援助を求める

周囲との関係性の構築段階以前では、両親、自助組織、支援者に対して、【断薬、不良集団との関係を切るための援助】を求めたり、【援助者に接近するアクション】を起こし、援助者を求める援助要請が行われた。方向性が定まらなると【心の隙間を埋めるため悪友に相談】する事態も生じる。周囲との関係性の構築段階以降は、指導者、地域の支援者に、【学び、仕事の質向上のための援助】を求めるようになる。

## IV 考察

援助要請・被援助志向性に影響を与える要因については、多くの研究が為されている（水野・石隅、1999；Nam et al., 2013；Li et al., 2014）が、本研究で明らかにしたい点は、心理プロセスを含む他者との、どのような関係性を経験していることが、援助要請行動・被援助志向性に影響を与えるのかという点である。いわば援助要請が生まれる基盤となるものを検討することを目的とした。問題と目的で述べたように、援助要請には社会的関係や対人スキルが重要となるが、非行少年は、他者との関係性構築において何らかの課題を持っている者が多いのではないかと考えた。そこで、非行を経験し、現在は立ち直っている者が、他者との関係性をどのように体験してきた

のか、援助要請行動をどの時点でやっているのか、その過程を明らかにすることにした。

まず、非行少年が他者との関係性構築においてどのような課題を持っているのか検討した点について述べる。本研究で明らかになった関係性構築の課題とは、〈大人に対する不信感〉と〈周囲との機能不全のコミュニケーション〉である。〈周囲との機能不全のコミュニケーション〉に関する記述を拾うと、「頼る存在が欲しい。私を必要としてくれる人が欲しい。一人でもいいから、誰か……。何の意味もない生活、自分の存在さえも確認できず、ただひたすら淋しかった、空しかったのです」（「非行と向き合う親たちの会」、2004）、「塾の勉強がつかったのではない。何よりも学校で良い子を演じ続けていくことがつかったのだ。だからそれを解ってもらえない母に対して、心の中で『俺の気も知らないで』などと思い、哀れんだ表情を浮かべている母が無性に気に入らなかつた」（「非行と向き合う親たちの会」、2004）。この時期において少年達は、援助を求めても得られないことに絶望し、あるいは援助を求めることは無駄、無意味であると感じている。

〈大人との葛藤 内面の葛藤に悩む〉少年達は、大人社会に反発することで対抗同一性（福島、1979）を築いたとも考えられ、この過程そのものは成長の一段階と捉えられる。したがって、暴力の被害体験のある少年達とは抱える悩みが異なると考えられるが、結果に注目すると、いずれの場合においても反社会性を強めることで周囲との関係性が損なわれ、大人社会と反目する状況に至ったという点において共通していると考えられ、〈大人に対する不信感〉と〈周囲との機能不全のコミュニケーション〉を、非行経験者の関係性構築の課題とする。

次にこの二つの課題からどのように回復するのか、検討する。「大人不信からの回復」に対応するプロセスは、〈家族の支え〉、①の支え、ガイドしてくれる大人との出会いである。①の支え、ガイドしてくれる大人との出会いのうち、〈大人への信頼感〉は、少年院での教官との1対1の濃密な関わりの中で、情緒的に受け入れられる体験により、徐々に不信感が取り除かれる変化が生じている。〈方向性を与えてくれる出会い〉の相手は、薬物の自助組織のメンバー、職場のオーナー、留学先の高校の先生であり、経験豊かな大人である。いずれも悩んでいるとき、迷っているときに、方向性を指し示したり、背中を押してくれる。安心できる大人から情緒的に抱えられ、人生の指針を与えられる関係性は、ソーシャルサポートと捉えることができる。ソーシャルサポートとは、「狭義には、家族や友人などのインフォーマルな資源、広義には、専門家や専門機関といったフォーマルな資源も含んだ多様な資源とのつながりである、ソーシャルネットワーク（social network）を基盤としたさまざまな援助のことである」（丹羽、2007）。ソーシャルサポートと援助要請についてはすでに多くの研究が為されており、両者の間には相関のあることが示されている（片受・大貫、2014；Knisely & Northouse, 1994；Nagai, 2015）。本研究と重ね合わせて考えると、ソーシャルサポートをしっかりうけていることは、援助要請行動、被援助志向性を高めることの要件になることが考えられる。

付言すると、〈方向性を与えてくれる出会い〉は、非行離脱において果たす役割が大きいのではないかと考える。②の周囲との関係性の構築が先に生起し、後になって①の支え、ガイドしてくれる大人との出会いが生起している事例があったことを、結果で述べた。この事例の執筆者は、ダンスチームの拡大に力を注ぎ、当時関わった者の中に薬物経験者や常習者が多かったことから

マリファナに手を出したことを述べている。偶然にもその頃、少年院の先生に出会い、いろいろな話をする機会を得、それを機にマリファナをやめたとある（セカンドチャンス！編、2011）。次に述べる②の周囲との関係性の構築と相俟って、①の支え、ガイドしてくれる大人との出会いは、非行からの離脱において重要である。

「機能不全のコミュニケーションの修復」に対応するプロセスが、②の周囲との関係性の構築である。〈周囲の人からの情緒的支え〉、〈受け入れられる〉、〈自分を認めてもらえる〉、〈自分を素直に出せる〉、〈周囲にコミットする〉の順に、受け身である関わりから、自己を表現し、自ら周囲にコミットする相互的な関わりへと変化していく。相互的な関わり構築の例として、ある手記では、「修学旅行で初めて自分とは違う環境で育ってきた人たちと語り合うことができたのだ。『自分は決して特別じゃないんだ』と思えた。そして、クラスみんなが『仲間だ』とさえ、思えるようになった。その後、僕はクラスに溶け込むようになり、いろんな行事に挑戦した。・・・ここでクラスの中に絆が芽生えた」と述べられている（「非行」と向き合う親たちの会、2004）。相互的な関わりへと変化した段階では、援助を受ける側であったり、援助する側であったり、相互の役割をとる場面が生じるであろう。日常的に援助する、援助を受ける経験の積み重ねは、少なくともインフォーマルな場面では、援助要請・被援助志向性を高める働きをすることを考える。薬物の自助組織に入った者は「あせりや不安は、仲間に話すことで自然と忘れ、仲間と話しをすることでクスリで苦しんでいた過去を笑い話に変える力が働き、クスリを使わずに生活することが苦痛ではなくなっていた」と述べる。同種の悩みを持っている者同士、自分もその一員であると認識できることは、安心感を高め、援助要請行動を容易にする。

自助組織、学校のクラスをコミュニティと捉えたと、②の周囲との関係性の構築は、コミュニティ感覚から捉えることができる。コミュニティ感覚について Sarason (1974) は、①他者との類似性の知覚、②他者との相互依存関係の承認、③他者が期待するものを与えたり、自分が期待するものを他者から得たりすることによって、相互依存関係を積極的に維持しようとする感覚、④自分はある大きな、依存可能な安定した構造の一部であるという感覚と述べており、McMillan & Chavis (1986) は、①メンバーシップ、すなわち所属している、互いに関わり合っている感覚、②影響力、すなわちメンバーが集団にとって、集団がメンバーにとって重要であるという感覚、③強化、言い換えれば統合とニーズの充足、すなわちメンバーのニーズが他のメンバーにより充足される感覚、④共有された情緒的結合、すなわちメンバーが、共通の歴史、場、時、同種の経験を共有し、今後もするだろうとの信念と述べている。これらの定義から、コミュニティに属していることから得られる感覚とは、情緒的なつながりを基本に、関わり合い、影響を及ぼし合い、互いのニーズを満たし合う感覚を得ることであり、既述した相互に援助する、援助を受ける体験をもたらす基盤となる、個人とコミュニティのつながりがどのようなものであるかについても、明らかにしていると考えられる。周囲との関係性の構築が進むと、多くのものは自分の進路を見だし、それに伴い、援助要請行動をとるようになる。コミュニティに所属する感覚が、自分の役割や存在意義を高める働きをし、方向性を与えているのではないかと考える。表2に取り上げたF・Kは、「友人の家では、おばさんがいつも暖かく出迎えてくれた。『気持ち落ち着くまではここにいろ』と食事を作ってくれ、風呂に入らせてくれた。」「私が「立ち直ろう」

という気持ちになったのは、ゲーム喫茶のオーナー夫妻からの「もっと大きな世界に行くべきだ」という言葉がきっかけだった」と述べる。近隣、オーナー夫妻が関わってくれ、周囲から支えられていると感じたF・Kは、「実家の近くに、呉服屋を経営する傍ら、子ども達に英語を教えている方がいた。…『こんな俺でも、目指せるものなら大学に行ってみよう』と頼んだという（「非行」と向き合う親たちの会、2004）。

非行経験者が、他者との関係性構築で持っている課題は、大人に対する不信感と周囲との機能不全のコミュニケーションであった。それぞれの課題に対して、①の支え、ガイドしてくれる大人との出会い、②の周囲との関係性の構築が、課題解決のプロセスとなっていた。関係性の修復のどの時点で援助要請が生起するのかを検討するには、何を求める援助要請か考える必要がある。本研究の結果から、2種類に分けて考えられることが明らかになった。すなわち逸脱行動や非行集団から離脱するための援助、もうひとつは進路を定めて今後の人生を歩むための援助である。それぞれ援助を求める時期が異なる。前者は、①の支え、ガイドしてくれる大人との出会いを経験した後に、後者は、①及び②の周囲との関係性の構築を経験した後に見られた。

今後の研究を深めるためには、二つのポイントがあると考えられる。

(1) ②の周囲との関係性の構築としてまとめた概念は、受け入れられている感覚から集団にコミットする感覚まで、幅広い関係性を含み混んだ内容となっているので、今後コミュニティー感覚を参考にしながら、さらに概念整理を行い、機能不全のコミュニケーションの修復に寄与する要因について検討し、援助要請の生起との関連性について検討を進めたい。

(2) 逸脱行動や非行集団から離脱するための援助を求める行動が生起するには、②の周囲との関係性の構築が為されていない初期の段階であり、①の支え、ガイドしてくれる大人と出会っていれば可能となる結果であった。したがって援助を求める相手は、知り合いの大人や専門機関になることが予想される。しかしもともと青年は、インフォーマルな相手に援助を求める傾向が強い（Rickwood et al., 2005）とするなら、周囲との関係性が構築されていない時期に、逸脱行動や非行集団からの離脱という切迫した課題に対処するには、どのように彼らを援助すれば良いのであろうか。今回取り上げた事例では、偶然にも援助してくれる大人との出会いが準備されていたが、現実には援助してくれる大人との出会いが得られない場合が多い。これについては今後の課題としたい。

最後に、分析対象者の選択、分析方法の観点から、本研究の課題を述べる。本研究の分析は、編集者の呼びかけに応じて投稿した者（『涙 それぞれの軌跡 私たちの「非行」体験 第3集』）、「セカンドチャンス！」のメンバーとして投稿した者（『セカンドチャンス 人生が変わった少年院出院者たち』）の手記による。したがって手記の執筆者は、投稿するだけの社会的な関係性を、築くことができた人々であると考えられる。一方、非行経験者の中には、人との関係性に恵まれなままにいる者もいるであろう。一口に非行を経験した者と言っても、関係性の持ち方に多様性のあることを考えると、結果を一般化することには慎重でありたいと考える。

また本研究の分析方法では、その目的に従い、他者との関係性が述べられている箇所を抽出して、分析対象とした。したがって、関係性を構築しようとしてできなかった、あるいは関係性を構築することを考えることすらしなかったといった、関係性の構築に至らなかった内容は分析対

象とはなっていない。たとえば援助要請の研究ではスティグマ (Vogel et al., 2006) や、援助要請の結果予期 (Vogel & Wester, 2003) などが援助要請の促進・抑制要因として考えられている。こうした要因については、今回の研究では取り上げることができなかった。今後、この点も視野に入れて研究を進めたい。

## 注

- 1) 保護観察に付されている者などを宿泊させ、改善更生に必要な保護を行う施設である (鴨下・松本, 2006)。
- 2) 「緊急的住居確保・自立支援対策」により、NPO 法人等が管理する施設の開きベッド棟を活用し、保護観察所から事業主に対して宿泊場所、食事の提供と共に、毎日の生活指導等を委託するもので、この施設を「自立準備ホーム」と呼ぶ ([www.moj.go.jp/hogo1/soumu/hogo02\\_00029.html](http://www.moj.go.jp/hogo1/soumu/hogo02_00029.html))。
- 3) 少年院出院者の自助グループである。

## 〈引用文献〉

- 天貝由美子 (1999) : 一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因. 教育心理学研究, 47 (2), 109 - 118.
- DePaulo, B.M. (1983) : Perspectives on help-seeking. DePaulo, B.M., Nadler, A. & Fisher, J.D. (Eds), *New Directions in Helping*, Vol.2 Help-seeking. 3-12, New York: Academic Press.
- 福島章 (1979) : 対抗同一性. 金剛出版.
- 「非行」と向き合う親たちの会 (2004) : NAMIDA -それぞれの軌跡 私たちの「非行」体験 第3集, 新科学出版社.
- 廣井いずみ・坂野剛崇・岡本潤子・渋谷幸靖・久世恭詩・永井智 (2018) : 非行少年の社会復帰について考える -かつて当事者であり現在は援助する者の語りから-. 司法福祉学研究, 18, 140-143.
- 法務省保護局 行き場のない刑務所出所者等の住居の確保～更生保護施設等の役割～ [www.moj.go.jp/hogo1/soumu/hogo02\\_00029.html](http://www.moj.go.jp/hogo1/soumu/hogo02_00029.html) (最終アクセス : 2018.10.8).
- 片受靖・大貫尚子 (2014) : 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 立正大学心理学研究年報, 5, 37-46.
- 鴨下守孝・松本良枝 (2009) : 改訂 矯正用語事典. 東京法令出版株式会社.
- 木下康仁 (2003) : グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂.
- Knisely, J.E. & Northouse, L. (1994) : The relationship between social support, Help-Seeking Behavior, and psychological distress in psychiatric clients. *Archives of psychiatric nursing*, 8 (6), 357-365.
- Li, W., Dorstyn, D.S., & Denson, L. A. (2014) : Psychosocial correlates of college students' help-seeking intention: A meta-analysis. *Professional Psychology: Research and Practice*, 45 (3), 163-170.
- McMillan, D.W., Chavis, D.M. (1986) : Sense of community: A definition and theory. *Journal of community psychology*, 14 (1), 6-23.
- 水野治久・石隈利紀 (1999) : 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向, 教育心理学研究, 47, 530 - 539.
- Nagai, S. (2015) : Predictors of help-seeking behavior: Distinction between help-seeking intentions and help-seeking behavior. *Japanese Psychological Research*, 57 (4), 313-322.
- Nam, S.K., Choi, S.I., Lee, J.H., Lee, M.K., Kim, A.R., & Lee, S.M. (2013) : Psychological Factors in college students' attitudes toward seeking professional psychological help: A meta-analysis, *Professional Psychology: Research and*

*Practice*, **44**(1), 37-45.

NHK クローズアップ現代取材班 (2013) : 助けてと言えない 孤立する三十代. 文藝春秋.

丹羽郁夫 (2007) : ソーシャルサポート・ネットワーキング. 日本コミュニティ心理学会 (編) (2007) : コミュニティ心理学ハンドブック 205-217. 東京大学出版会.

Rickwood, D.J., Dean, F.P., Wilson, C.J., Ciarrochi, J.V. (2005) : Young people's Help-seeking for mental health problems., *Australian e-Journal for the Advancement of Mental Health*, **4**(3), 1-34.

Sarason, S.B. (1974) : *The psychological sense of community: Prospects for a community psychology*. Jossey-Bass.

特定非営利活動法人 セカンドチャンス (2011) : セカンドチャンス！—人生が変わった少年院出院者たち. 新科学出版社.

Vogel, D. L., Wade, N. G., & Haake, S. (2006) : Measuring the self-stigma associated with seeking psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, **53**(3), 325-337.

Vogel, D. L., & Wester, S. R. (2003) : To seek help or not to seek help: The risks of self-disclosure. *Journal of Counseling Psychology*, **50**, 351-361.

## Summary

The aim of this research was to study how young ex-offenders develop their relationships, what kind of experiences they get from their relationships, and during which stage of the development of their relationships they seek help, as they desist from crime by analyzing their memoirs. The ex-offenders have problems with being able to trust adults, and with being unable to get involved with others. They addressed the former problem by being cared for, supported, and guided by adults and gaining a sense of trust (first stage), and solved the latter problem by building relationships with others and becoming a member of the community (second stage). I found two purposes of help-seeking: the first is to withdraw from gangs and desist from crime, and the second is to accomplish their dreams. I concluded that ex-offenders who seek help for the former experienced only the first stage—to get help from formal sources—and those who seek help for the latter have experienced both stages and get help from informal sources as well.

## Keywords

desistance, help-seeking, dysfunctional communication, psychological sense of community, M-GTA

表1 非行経験者が援助要請を行うまでの他者との体験過程（カテゴリー名、概念名、定義）

カテゴリー名	概念名	定義
A 大人との葛藤・内面の葛藤に悩む	親との関係をあえて切る	今までの自分には戻りたくない、そのためには親と縁を切ると決断する。
	大人に対する安心感と反発心	安心して素直に大人と話すことができるときと、反発心から逃げたいときがあった。
	自分自身の中の葛藤	おとなの世界観に反発し、いつも衝突。でも自分自身の言動の不一致にも気づかされ、葛藤を起こしていた。
A 暴力の被害体験	防御しきれない攻撃に、傷つき、怯える体験	虐待者から攻撃される怯えにさらされ、傷つき、状況をコントロールすることはできないことを覚える。
	暴力への適応	虐待者に気に入られるために、良い自分を演じようとした。
A 大人に対する不信感	尊厳を持って扱われなかったことによる大人不信	悪いと決めつけられ、大人への信頼を失う。一人の立派な人間として扱ってほしかった。
	納得できない大人社会との孤立無援の戦い	納得できない大人社会に立ち向かおうとするが、孤立無援。
A 周囲との機能不全のコミュニケーション	周囲の無理解	苦しさを理解してくれない重要他者に、解ってもらえないことのいらだちを覚える。
	うまくいかない意思疎通	重要他者との意思疎通は、わかり合うときもあれば、暴力的になることもあった。
	頼る、頼られる関係性を渴望	頼る、頼られる存在が欲しく、満たされない心の隙間を埋め合わせようとするが、被虐待体験の再燃となる。
B① 家族の支え	いつでも受け入れてくれるやさしさ	叱責されても仕方ないときに身を案じる言葉、常に迎えてくれる優しさ
	苦しい時を支えてくれた家族の愛	つらいときにも信じてくれる人がいることをよりどころにする。
	家族の支えによる葛藤	家族の支えにより、自分が変わらなければいけないことに気づき、葛藤に苦しむ。
	変化を生み出す安心の土壌	褒めてくれることで、親子の関係は保たれ、そのことが変化を生み出す安心の土壌となる。
B① 大人への信頼関係の構築	厳しい指導者への納得できない気持ち	頑張りを理解してくれない、悪い部分を見逃さない先生の指導に納得できない気持ちがわいてきた。
	耳を傾け、本気で考えてくれる大人への信頼	自分の話をただ聞いてくれ、信じてくれ、本気で考えて叱ってくれる大人を信頼する。
	優しさを感じるふれあいに、取り除かれる不信感	ポディータッチを介してのふれあいに、やさしさ、信頼感を感じる。大人への不信感が徐々に取り除かれる。
B① 方向性を与えてくれる出会い	マイ師匠との出会いのためのレディネス	マイ師匠に出会うようになるには、レディネスを作る必要がある。
	自助組織との出会い	自助組織のメンバーは、真剣に話を聞いてくれ、親近感がある出会いだった。
	励ましによる人生の転機	信頼できる大人からの勧めにより、勉強に動機づけられ、将来に希望をもつことができた。
	肯定的な意味づけで支えられる体験	自分の過去を明かすことの迷いを相談し、肯定的に意味づけてもらい、自信を得た。

B② 周囲の人々からの情緒的支え	周囲の支えにより自分のやるべきことに専心	やさしい励ましを受け、安心して自分のやるべきことに専念できるようになった。
	救ってくれた暖かい人たちの支え	温かい人たちが、支援してくれたことがありがたく、立ち直ることができた。
	人から頼りにされる体験	信頼できる大人から手伝いを頼まれた。はじめて人から頼りにされる体験だった。
	いつでも帰って行ける場所	別れのときに、みんなが送り出してくれ、いつでも帰って行くことのできる場所と感じた。
B② 受け入れられる安心感と自信	受け入れられる安心感	仲間や信頼できる大人に受け入れられ、ほっとした気分になる。
	受け入れられることによる自信	仲間に関心を持って受け入れられると、過去も受け入れてもらえることを体験、自信となる。
B② 自分を認めてもらえる	自分を認めてもらえる体験	自分らしさを肯定的に認められ、自分という人間を受け入れてもらえたと嬉しく感じた。
	大人としての振る舞いで認められる体験	社会的に受け入れられる態度で主張することで、敵だと思っていた大人からも認められる。
B② 自分を素直に出せる	自分を素直に出せる	信頼できる人には、自分の体験を素直に話すことができ、これから頑張ろうという気持ちになれる。
B② 周囲にコミットする	みんなで体験した達成感と一体感	仲間とひとつのことを達成することで、今まで感じることのできなかつた「達成感」や「一体感」を感じる。
	コミュニケーションの広がりによる疎外感の解消	自分とは違うタイプの仲間と語ることで、自分は特別ではないと思うことができる。
C 自分を受け入れる	受け入れられることによる自己受容	みんなに理解されたと感じることで、安心でき、「私は私でいい」と思えるようになった。
	新たな自分	信頼できる大人のおかげで、新しい自分との出会いの毎日に、生き生きと過ごす。
D 感謝と償う気持ち	もう迷惑は掛けまい	親に迷惑かけまいと思えるようになった、この時期が立ち直りを決心した時期である。
	親への感謝と申し訳なさ	親が自分のためを思って必死になってくれたこと、見放されなかったことに感謝する。償う気持ちで生活していきたい。
	被害者、その家族に対する悔いと回復への願い	被害者に重大な障害を与え、ご本人、その家族の人生を狂わしたことへの悔い、被害の回復を願う気持ち
D 後輩の役に立つことで感じる次世代へのつながり	後輩によるイニシエーションとしての卒業式	後輩は自分たちの気持ちを汲み取り、卒業式に人生の意味を付与した。
	後輩や仲間の役に立つことが自分の責務	自分のやるべきことは、後輩や仲間がまっすぐ生きていけるように、自分の経験を役立てることである。
E 援助を求める	断業、不良集団との関係を切るための援助	信頼できる大人に断業や不良集団から関係を切る相談をする。
	援助者に接近するアクション	八方塞がりだったときに、強い意志で、援助者との再会をたくり寄せた。
	心の隙間を埋めるため悪友に相談	心の隙間を埋めるために、悪友の一人に声をかけ、安心感を得る。
	学び、仕事の質向上のための援助	よりよい仕事をするため、進学のために人に頼んで教えてもらう。

表2 ①支え、ガイドしてくれる大人との出会いの段階、②周囲との関係性の構築の2群の順序に関する検討資料

<p>F・K 男子 (28才・学習歴経営) [深 それぞれの軌跡]</p>	<p>支えガイドしてくれる 大人との出会い (支援者、支援内容)</p>	<p>母 ・重臣の朝服刺繍で入院した時・・・母親が漫画を印刷してくれた。ヤクザ母親のドレスの利いた台度も思った。 ・家に入ると、何時であろうと母親が出てきて、何日ぶりであろうと「お帰り」と言って食事をつくってくれた。</p>	<p>両親 ・両親に褒められる機会も増えた・・・みんなは口々に私のことを心配していたが、父親が「あいつはちょっと回り道をしていたと像で似ているぞ」と誇らしげに話していたと像で聞いた。</p>	<p>姑のオーナー夫妻 ・姑のオーナー夫妻から、「あんたはこんな世界にいるような子じゃない。通信制でもいいから、せめて高校卒業の資格だけはとれ」と言葉をかけられた。・・・オーナー夫妻から言われて数ヶ月後、19才を迎える年の夏に、初めて大検を受験してみた。・・・その時、初めて「やり直したい」と心から思った。</p>	<p>近隣者 ・勉強を始めてからは、その家に行くたびにマグラの仲間が出てきた。「おぼろんはお前の応援団だ」と合格を信じ、励ましてくれた。</p>	<p>近隣者 ・「2年間卒業して賃目日にやるなら、絶対合格させてやる」と返事が返ってきた。 ・家だと勉強しないだろうということで、住居の一室を私の部屋として開放してくれた。</p>
<p>周囲との関係性の構築</p>	<p>援助要請</p>	<p>近隣者 ・友人の家では、おぼろんがいつも暖かく出迎えてくれた。「気持ちが悪くままではここにいろ」と食事を作ってくれ、風呂に入らせてくれた。</p>	<p>近隣者 ・友家の近くには、負傷屋を経営する傍ら、子こも道に英語を教えている方がいた。・・・「こんな他でも、目指せるものなら大学に行ってみなさい」と言う</p>	<p>近隣者 ・「2年間卒業して賃目日にやるなら、絶対合格させてやる」と返事が返ってきた。 ・家だと勉強しないだろうということで、住居の一室を私の部屋として開放してくれた。</p>	<p>近隣者 ・勉強を始めてからは、その家に行くたびにマグラの仲間が出てきた。「おぼろんはお前の応援団だ」と合格を信じ、励ましてくれた。</p>	<p>近隣者 ・「2年間卒業して賃目日にやるなら、絶対合格させてやる」と返事が返ってきた。 ・家だと勉強しないだろうということで、住居の一室を私の部屋として開放してくれた。</p>

